

姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一作を選考するものです。

第五回目という節目を迎えた今回は、全国から一四〇八点の力作が寄せられました。

〈生きることは創ること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはず。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

目 次

■ 中学生部門

最優秀賞 「美しいとは何なのか」

兵庫県 姫路市立東光中学校

二年 森 美翠 …… 4

優秀賞 「静寂の中の怪人」

宮城県仙台二華中学校

二年 菊地 馨 …… 6

佳 作 「幸せだけがあるように」

兵庫県 小林聖心女子学院中学校

二年 大屋莉々花 …… 10

■ 高校生部門

最優秀賞 「古書店へ行く」

広島県 福山暁の星女子高等学校

二年 松本 実桜 …… 14

優秀賞 「十数秒」

兵庫県 姫路市立琴丘高等学校

三年 森井 郁佳 …… 18

佳 作 「手紙」

兵庫県立加古川東高等学校

一年 猪熊 楓子 …… 21

■ 一般部門

最優秀賞 「滝桜」

福島県 南相馬市（無職）

鈴木 篤夫 …… 25

優秀賞 「お菓子いた！」

大阪府 堺市（無職）

相野 正 …… 29

佳 作 「二つの願い」

神奈川県 川崎市（英語講師）

浅井 恵里 …… 33

■ 概 要

■ これまでの入賞作品

…………… 38

第五回 藤原正彦エッセイコンクール 入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 姫路市立東光中学校 二年

美しいとは何なのか

森 美翠

私はクロード・モネに一目惚れした。正確に言えば、彼の作品に。

モネの代表作は「睡蓮」だが、私がモネを知ったきっかけであり、今でも大好きな作品は、あまり知名度の高くない作品である。

鮮やかな空のブルーと補色のヒマワリの暖かな色合い、その二つを融和する優しい緑。作品の名前は、「ヴェトウイユのモネの庭」。美術の教科書でミケランジェロを探しているときにたまたまその作品に出会った。

私は、穏やかで懐かしささえも感じるその絵に心をうたれた。私にはその絵の空の雲が少女が、ヒマワリが動いて見えた。息を吸えば、絵に描かれたモネの庭のあたたかい空気が肺に入ってくるような気がした。青みを帯びてぼんやりとしたその絵は、モネの見た景色、肌に触れる穏やかな暑さ、彼の眼を奪ったであろう眩しいヒマワリを鮮明に映し出していた。美術の教科書の隅に小さく載っていたただけだったが、その絵は確かに私の「美しさ」の概念を変えたのだった。

美しいとは、何なのだろう。幼いころは、ピンクで、ハートやリボンのついたきらきらしたものの、という認識だったし、大きくなってからも、ダイヤモンド、新垣結衣、大輪のバラ、蝶、のような形の整っているものだと思っていた。

モネは妻を病気で亡くし、貧しい暮らしを送っていた。この作品は、モネの妻の死から二年後貧しさから抜け出し、精神的な立ち直りを見せた一八八〇年に描かれた。この作品は、モネが心から幸せを感じ、この場所を、この景色を、この気持ちを残しておきたい、と思つて生まれてきたのだと私は思う。その気持ち、あの光に溢れた、あたたかく「美しい」作品を作ったのだ。

美しい、という感情や、感動を呼び起こすものは「物」ではなく、それに向けられた人の思い出や感情なのではないか。物や景色は人の感情を向けられて憂いや温かみ、優しさを帯びる。

私はまだまだたくさんさんの絵を鑑賞し、作者の気持ちに寄り添っていききたい。ピカソの「ゲルニカ」の衝撃、ゴーギャンの「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」の飲み込まれそうな不安感、クリムトの「接吻」の男女の愛など、人々の価値観、美しさについて触れ、考えていこうと思う。

中学生部門

優秀賞

宮城県仙台二華中学校 二年

静寂の中の怪人

菊地 馨

冬のスキー場。ゆつくりと僕はリフトを降りる。目の前の銀世界にいよいよ滑り出すぞという胸の高まりが絶頂に達する瞬間だ。周りの人々も、笑顔で喋ったり、準備運動をしたり。ゲレンデのコースの滑り出しは、皆うきうきと賑やかで幸せそうである。

しかし僕はやがてその華やいだ喧嘩から抜け出して、ひっそりと静まり返ったある場所へ、ふらりと滑り降りてゆく。スキーを止めた先、そこには、時の流れから取り残されたかのように佇む、廃止されたリフトがある。僕はしみじみとリフトを見上げ、異質な時の流れに溶け込んでいく……。これはスキー場での、最近の僕の儀式のようなものである。僕は、廃止された索道の熱烈なファンなのである。

ここで「索道」とは何なのか説明しておく、リフトやロープウェイなど高い標高差のある区間を登る交通機関の総称である。そして、これは鉄道的一种に数えられ、索道マニアは数こそ少ないものの、れっきとした鉄道マニアの一派として認められているのである。

そして今、世間では廃墟のブームが起こっている。「廃墟の美学」は遡ること十八世紀からイギリスでブームになっていたらしい。メランコリックで懐かしい気持ち呼び起こす廃墟への熱狂から、イタリアの崩れかけた遺跡を巡るツアーが流行したが、ついには人工的に作られた廃墟風の建物を自分の庭に配するまでに加熱したそうだ。

廃墟愛好家は鉄道ファンの間にも存在し、昔の駅舎や廃線を訪れる人は多い。しかし、廃れたリフト、ロープウェイの魅力に気づき、探し求める人間はそう多くはないだろう。

僕が廃止された索道に惹かれるようになったのは小学校四年のころ、岩手県のスキー場にある一本のゴンドラリフトに出会ったことがきっかけである。そのゴンドラは長さ3531メートル、標高差900メートルと国内最大規模を誇る迫力満点のものであった。

それだけに僕は廃止されてしまったことが無念でならず、こみ上げる悔しさから、実に不機嫌な気持ちでそれを見上げたのだ。ところが、僕は何かはつとするような異質な雰囲気に呑み込まれそうになった。シンとしたグレンデに、錆びつきながらも威風堂々とそり立つ支柱。鋭く尖って天を衝く先端、鈍く銀に光る芯、外れかけた巨大な車輪。それは雪と風の中に佇む、厳しさと冷たさを身に湛えたまさに怪人であった。しかしその怪人はまた頼もしさ、懐かしさを併せ持っていた。過ぎ去ったスキー全盛のバブル期、このゴ

ンドラは大勢のスキーヤーたちをその腕で運び、人々の興奮、期待、喜びを支えていたのだ。僕は思わず、動かないゴンドラリフトに向かって心の中で語り掛けていた。『君は昔、ゲレンデの要としてがんばっていたんだね。今は静かに昔の夢をみているんだね？』

この時から廃止索道の魅力の虜になった僕は、父から譲り受けた古いスキー情報誌のゲレンデマップを隅々までむさぼり読み始めた。そして東北各地のスキー場の廃止リフト詣でを始めたのである。

廃止された鉄道の跡には記念碑が建てられていたり、きれいに整備された公園や博物館になっていたりするところもある。ところが索道はそうではない。ある日突然ひっそりとゲレンデマップから消え、存在があったことさえ忘れられていることが多い。そしてやがて撤去されるのだが、その費用や手間をかけられなくなったのか、放置され朽ちるにまかされているものが多い。

だが放置されていることが、実は最大の魅力なのかもしれない。かつて確かにこの場所では、大勢の人を乗せて活躍していたのだということを、まざまざと感じさせてくれるからである。小綺麗に整備された、作り物めいた鉄道跡地で、本格的に昔を偲ぶこと、廃線の美を楽しむことは僕にはできない。本物、実物が持つ迫力こそが大事なのである。ギシギ

シと重く滑車をきしませながら、今にもモーターが動き出しそうな気配。笑いさざめく大勢の人々を座席に乗せ黙々と運ぶ頼もしい姿が、メランコリックに色あせた懐かしい情景として目に浮かぶ。それはなぜか現役の動く索道を眺めても決して味わえない、イリュージョンである。

スキー人口が減り、次々とリフトが消え、寂しさが増していく一方のスキー場。スキーヤーにとつて憂うべき時代ではあるけれど、僕は自分で発見した「廃止索道」の魅力を、人々に伝えていきたいと思うのだ。

さわやかにスキーを楽しむのも良いけれど、廃墟に惹かれる同好の士よ、静まり返った雪山にすつくと佇むゲレンデの怪人に、ぜひ一度逢いに来てください。

中学生部門

佳作

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 二年

幸せだけがあるように

大屋 莉々花

その日はすごく空が綺麗だったから、なんとなく旧友に手紙を書いてみたくなった。

〈今頃どこで何をしていますか。毎日楽しく過ごしていますか。〉

この手紙は実際に投函されるのか、それともただ言葉が私の中におさめられて終わるだけなのか、それは重要じゃなかった。

〈今日みたいな素敵な日に、またどこかで会いたいです。〉

「手紙を書きたいの。だから、住所、教えて。」

そう声をかけられたのは、彼女が転校する一週間前。ほのかな春の光がうつすらと微笑む、穏やかな昼の教室だった。彼女はクラスで少し浮いた存在だった。彼女を知ったようなふりではないが、優しく、いつでも笑っているような性格だったから、余計にクラスメイトは彼女が気に入らなかつたのだらうと思う。実に聡明で卑怯な人間は、彼女といれば自分も同じような扱いを受けるだらうと恐れ、あからさまに彼女を避けた。彼女に対するクラスメイトの視線が温かくて優しいものではないと私も勘づいてはいたが、私は毎日なん

となく鈍いふりをして、たまに知らん顔をしたりした。彼女がにこやかに私に話しかけた時、背中に突き刺さるクラスメイトの視線が恐ろしかった。いいよ、と戸惑いつつも私は紙きれに自分の住所を書いて渡した。

「ありがとう。」

彼女がにっこり笑ったその瞬間から、私と彼女の期限付きの友情は始まったのだ。

「京都の幼稚園に通ってたの。」

「うんうん。」

確かカタカナの多い名前の幼稚園だったと思う。

「新しい眼鏡にしたんだけど。」

「あ、ほんとだね。」

すぐく目の大きい可愛い子だった。春雨の過ぎ去った帰り道に、私と彼女のつたない会話がぼつりぼつりと浮かぶ。やわらかな風が、ただ私達を見ていた。

「筆箱を落とした時に一緒に拾ってくれたから。」

私は彼女の名前をそっと口にする。

「クラスの中で優しいと思う人と、その理由がわかるエピソードを一緒に発表してください。」

三年あやめ組の道徳の教室で、彼女の名前をあげたのは私だけだった。気のせいだと言われればそれまでだが、そのとき、先生の瞳の奥が僅かに綻んだ気がした。

〈お手紙ありがとう。私は元気だよ。東京での生活はもう慣れたかな。〉

〈五年生になったね。何組になった？〉

それから季節が移ろって、気付けば私達が実際に会って話した言葉より、手紙の中で紡がれた文字の方が多くなっていた。

〈あけましておめでとう。素敵な一年になりますように。〉

眼鏡は外したのだろうか、彼女の大きな目は相変わらずだ。あっけなく東京へ行ってしまう彼女との思い出を、今でもそつと瞼の裏に映し出してみる。

彼女がクラスで浮いていたきっかけが何だったのか、私は知らない。彼女をからかう人がいて、彼女をけなす人がそこにはいたが、私は愚鈍なふりをして、聞こえていないような顔をした。でもきつと彼女は鈍感ではなかったのだと思う。彼女はクラスメイトがとる自分への態度に気付いていて、私が他に友達を持っていることを知っていた。彼女と私の思い出が、いつも帰りの坂道だけに留まっていた理由が、彼女が私に教室で話しかけなかった理由が、今ならわかる気がして、どうしようもなく切なくなる。彼女と過ごした時間が尊いと感じるまでは、まだまだ私の心は未熟だった。今更になって、その記憶を愛おしく

思う。まさかいなくなるなんて思っていなかった。あのときそれを知っていたら何かが変わっていたのかなあと、くしゃみをしながら考える私は、相変わらずこの街で暮らしている。

あれから私達は、花の舞う季節を越えて、星の浮かぶ夜を明かして、それぞれの場所生きてきた。でも、きつと私達は、今でもあの頃の思い出を、辛いことも全部含めて、笑って語り合えるほど大人ではないのだろう。でも、愚鈍なふりをし続けられるほど子供でもない。流れを断ち切るほどの大きな声は出せないが、背中に冷たい目が降り注いでも、そつと手を差し伸べられる強さくらいは身につけたように思う。誰にとつても、誠実でありたい。

へお元気ですか。今頃どこで何をしていますか。毎日楽しく過ごしていますか。私は相変わらずです。今日みたいな素敵な日に、またどこかで会いたいです。それまで元気で過ごしてね。これからも幸せなことだけが多くありますように。∨

高校生部門

最優秀賞

広島県 福山暁の星女子高等学校 二年

古書店へ行くこう

松本 実桜

私には最近、新しい趣味が出来た。それは古書店に行くことだ。古書店に行くと真っ先に店の前に積み重ねられて乱雑に置かれている百円程度の古本の中からなんとなく気になったのを一冊選んで買うのが私の中ですでに決まっているルールだ。

古書店に初めて訪れたのは、今年の八月がスタートしたばかりの頃だった。あの時の自分はまだまさかこれから古書店に通いつめることになるなんて想像もしていなかった。なぜなら私は今まで古本が好きではなかったからだ。いや、むしろ嫌いであった。古本特有の甘い匂い、紙の変色、シミなどの汚れ、そのどれもが私には不快で仕方がなかった。古本を手につくとそれらが自分の指をつたってからだ全体へしみこんでいくような感覚に襲われるのだ。だから何よりも新しい本が好きだった。真っ白な紙は、まだ誰にも汚されていない自分だけの本だと伝わってきて心地よかった。

私が古書店へ行ったのは、ほんの些細なことがきっかけだった。夏休みの補習のため学校に行った時、教室で友達古本を読んでいた。なんとなく気になり

「その本、どうしたん？」

と聞くと友達が

「古書店で買ったんだ。よく行く店だけど最近、本が増えすぎて床にまで置いてあるから奥まで入れなくなっちゃった」

と笑いながら言った。「この辺に古書店なんてあったかなあ」と疑問に思っていると駅近くにあつて珍しい本や安い本がたくさんあると教えてくれた。「珍しい」「安い」どちらも魅力的な言葉だ。しかし、すぐにそれが古本であると思ひ出しその話をそれ以上聞こうとはしなかった。

その日の帰り道、ふとその話が頭をよぎった。時間を確認すると次の電車まで四十分以上ある。その間、何もすることがなく暇なのだから時間つぶしにいいかもしれないと思ひ立ち、古書店に行つてみることにした。店に着くと想像していたよりも小さくこじんまりとした店だった。店の前や中に並べられた、たくさん古本が目をはひく。中に入ると案の定、古本の甘い匂いが漂つてきた。それでもせっかくなので来たのだからと本を見ていくと友達が言つていたように普通の店では売っていない古いものや何年も前の雑誌など珍しいものが多くあつた。しかしどれも買う気になれずにいると店の前に置かれた、かごの中の一番上につかっている本が目についた。手にとつてみると「歌の本」と書かれてあり、詩の本だった。

所々に入った挿絵が綺麗で直感で「これだ！」とすぐに店主の所に持つていくと

「おっ、難しい本だね。買って来てあげよう」

と店主が話しかけてきた。普段行く店の店員は事務的でいつも同じ言葉の繰り返しだったのでとても驚いた。しかし初対面の私に笑顔で話しかけてくれたことが嬉しく私も自然と笑顔になっていた。

店を出て電車の中ですぐに買ったばかりの「歌の本」を読み始めた。読み進めていくと何ヶ所か線が引いてあったりコメントが書いてあったりした。少ししてそれが強く共感した所やお気に入りの部分であることが分かった。その時、まるでこの本の前の持ち主と私を時を越えて対話しながら読んでいるような気持ちになった。今まで友達と読んだ本について語り合うことがなかったのも楽しかった。

それから私は、よく古書店へと足を運ぶようになった。知ってしまったからだ。古本の魅力を。店主の気さくで優しい人柄を。

古本には人と人との「つなぐ」力がある。自分と住んでいる場所や生きている時代さえも違う他人とを一冊の本を通してまるでその場で対話しているかのように。古書店にはそんな古本との出会いで溢れている。だから私が数多くある古本の中から「歌の本」と出会えたことは奇跡なのではないか。そう思うからこそ日本人が昔から人との出会いを大切に

してきたように私も古本との出会いを大切にしていきたい。

私は今日も古書店へ行く。新たな古本との出会いに心躍らせながら。

高校生部門

優秀賞

兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 三年

十数秒

森井 郁佳

「黙想ーっ。」

号令の音が響き、やがて静寂が訪れる。衣擦れの音も聞こえなくなる頃には、普段よりやや落ち着いた息づかいが耳に届く。少し意識を向けると、風に揺れる葉の音、鳥の声、他の部活動の音が聞こえてくる。もちろんそこには、さっきまで武道場に響いていた竹刀で打ち合う音も、気合の声もない。何か喧騒から解放されたような、あるいは抜け出したような、なんとも言えない不思議な感覚にとらわれる。私は剣道を始めた頃からの時間が好きだった。

私が剣道を始めたのは小学三年生の夏だ。警察署で習い始めたこともあり、本当に先生が怖かった。(高校生となった今でも変わらず怖いのだが。)稽古中にそんな先生から逃られる唯一のやすらぎのひとときがこの黙想をしている時間だった。怒られる心配もないし、小突かれる心配もない、などと高を括っていると、いきなり姿勢を注意されたりもする。無心になれと言われていた黙想は、どうも小学生の私達には難しかった。薄目を開け

て見てみると、口がずっと開いてるやつや鼻息が変にうるさいやつもいて、前に座っている先生が必死に笑いを堪えていたのを覚えている。小学生の私にとつてこの時間は、とにかく姿勢を正して目を軽く閉じ、手を膝の上で組んでいるだけに思えた。

高校に入ってから、私は稽古前後に行うこの黙想をただのルーティンのように行っていたのだが、ある時から黙想の時間に対する考えが変わった。それは、世界選手権に出場した日本代表の選手が黙想をしている写真を目見て、これは違う、と思ったのがきっかけだ。その写真からは選手の真剣さ、ひたむきな姿勢、自信……言葉では表しきれない雰囲気や滲み出していた。感動した。自分が今まで粗略にしてきたことを日本のトップの選手達が丁寧な真剣に行っているのを見て、自分が恥ずかしくなった。それからは、黙想をするたび、心を込めて真剣にしようと心懸けるようになった。

黙想に対する姿勢が変わってから「無心」という状態が感じられるようになってきた。試合中であれば、サツと視界が開けて見え、周りの音が気にならなくなったり、相手の足の指先の動きまでがはっきりと見えるようになる。黙想中であれば、周りの音や風がすぐ近くに感じられ、瞼の裏に映像が流れる。自分が失敗した場面だったり、こう動きたいとイメージした場面の映像だ。「黙想」というひとつの行動に対しての考え方が変わったただけで、試合や稽古への良い影響があった。無心になることができるようになったのはもち

ろん、一日一日の稽古も全力で取り組まなければと思うようにもなった。

部活動を引退した高校三年生の私には、あの道場での「黙想」の時間はもうない。今はほんの十数秒さえ惜しんで勉強している。自分で自分を追い込み、プレッシャーをかけて、今置かれている状況に打ち克とうとしている。そして最後には疲れてしまい、手が止まる。しかし、次の瞬間には見えない何かに追い立てられるようにまた手を動かす。そんな時、「黙想ーっ。」

と心の中で自分で号令をかけ、ほんの十数秒目を閉じて周囲の音に意識を向けてみる。そうして、風の音や鳥の声、時には雨音に身を委ねたり、周囲のページをめくる音やペンがよみがえってくる。そして次に目を開けた時には、それまでとは違う、何か新しい時間軸で動く世界が私の目の前に現れるのだ。

「黙想ーっ。」

号令の音が響き、やがて静寂が訪れる。心が無に近づくにつれて、普段よりやや落ち着いた息づかい、風に揺れる葉の音、鳥の声、様々な音がすぐ近くに感じられる。目の前には竹刀を構えた相手。すかさず竹刀を振り降ろすイメージ。「やめ」の号令をかけるまでその間わずか十数秒にすぎない。

手紙

猪熊 楓子

先日、地元の夏祭りで十年ぶりに友達に会った。最後に話したのは幼稚園時代のことだ。私たちは会ったときお互いが誰だかすぐにわかった。といっても、私は幼稚園児だった頃に彼女と遊んだ思い出を随分前に忘れてしまったし、顔もなんとなく覚えていない程度だが、彼女を見た瞬間、昔と全然変わっていないなど感じたのだ。私は久しぶりに彼女と話しているうちに、卒園のときにもらった彼女や他の友達からの手紙を思い出した。当時のことこそ思い出せなかったが、通っていた幼稚園のほとんどの友達と違う小学校に入学した私にとって、その手紙は私と友達を繋ぐ大切なものだった。今でも部屋の片づけの途中でよく読み返しては、拙い字と人物かもよくわからないような絵にほっこりしている。

私の部屋には、もらった手紙を入れておく小さな箱がある。誕生日のお祝いや、中学校で部活を引退したときにもらった後輩からのメッセージなど手紙の内容は様々だ。私は手紙には、相手と一緒に過ごした時間とか、何を書くか悩んだ時間とか、手紙が相手に届くまでの時間など時の流れのようなものが詰まっていると思う。最近では大事な行事についてのことでもSNSで連絡をとることが多くなっている。実際に筆をとらずに書く文章

も、手紙と同じように思い出を綴ったり、何を書くか考えて何度も打ち直したりすることがあるから、デジタルの言葉も手紙の言葉もたいして変わらないのではないかと思えてくる。

多くの人が利用しているLINE。送信ボタンを押せば世界中どこへでもすぐにメッセージを届けられる。相手は届いたメッセージに返信し、またこちらがその返信に返信するという形で、どんどんやり取りが続いていく。セリフのふきだしの傍には送信時の正確な時刻が記載されるから、誕生日の00・00ぴつたりにお祝いコメントが送られてきたときには嬉しくなる。しかし明確に記された時刻の数字や縦長に続くやりとりによって一つ一つのメッセージは相手が時間をかけて考えた文章であっても何時何分という一瞬のくくりでまとめられてしまうように感じる。また統一された字体からは書き手の性格やこころを読み取ることができないからどこか寂しい。夏祭りや遭遇した彼女とは毎年年賀状のやりとりをしていた。今どきの子にしては珍しく、暑中見舞いをくれたこともあった。面と向かって話さなくとも、筆跡や添えられたかわいらしい絵を見れば彼女の優しい雰囲気は伝わってくる。5歳までの記憶しかない私が、彼女が変わっていないと感じたのはずっと続けていた形に残る言葉の交換のおかげがひとつにあると思った。LINEも読み返そうと思えばいつでも見ることができけれど、多くの人は今までに積もったメッセージの

中から特定の文章を探しだしてもう一度読むなんてことはしないだろう。文字や紙の柄、便箋の口に付けるシールなど個性溢れる手紙だからこそ、LINEのように顔が見えなくても温かみを感じるのだと思う。

私は百均や文房具屋さんで好みの便箋を買い集めるのが好きだ。友達にプレゼントをあげるときには手紙も一緒に渡すことが多いのだが、毎回同じ柄の便箋ではつまらないからとついついたくさん買ってしまふ。小学生のとき、英語の先生に韓国に住む同年齢の子と英語で文通をしてみないかと言われたことがある。国境を越えてやりとりする機会は滅多にないと二つ返事で引き受けた私は、母にT H E日本といった感じのする和風な兎の便箋を買ってもらった。実際に韓国から届いた手紙には、国の文化や、彼女にイングリッシュネームがあることなどが綴られていた。手紙の内容は私にとって新鮮なことばかりで、読んでいるだけでわくわくした。私も日本特有の文化を紹介しようと小学生なりに辞書を引いたり先生に聞いたりして英語で文章を考えた。彼女からの手紙は「I want to we are very fast friendly」と締めくくられている。高校生になつた今見ると文法がでたらめだとか余計なことに気が付くけれど、小学生の自分にとってはただただ嬉しかった。私が送つた手紙でなぜかやりとりは終わってしまい彼女から私に手紙が送られてくることは二度となかったけれど、私にとって彼女は今でも大好きなペンパルフレンドである。

現代では様々なコミュニケーションツールがあり世界中の人々と簡単に繋がることのできる。手間をかけずにいつでもどこでもだれとでも話せる時代だからこそ、手紙の良さを再認識できると思う。非日常的なことには心がときめくものだ。普段のやりとりはLINEで、でもふとしたときに机からお気に入りのお箋を引っ張り出してきてペンを持ち、友達や家族など、手紙を送る相手のことをじっくり考える。誰かに思いを巡らせる時間は素敵だ。

一般部門

最優秀賞

福島県 南相馬市

滝桜

鈴木 篤夫（無職）

外泊許可を貰った妻を迎えに行くと、妻はこぼれんばかりの笑顔を見せた。ベッドの上には入院時に持ってきた旅行バッグがまん丸に膨らんで置かれていた。

私は小さな計画を用意していた。花が好きな妻に、帰路遠回りになるが三春の滝桜を見せようというものだった。

滝桜は樹齡が千年を超えるという枝垂桜の巨木で、国の天然記念物になっている。五月の連休に満開になり見物客で大いに賑わったが、連休も終わったので人出が少ないうちと思われた。まだまだ見ごたえがあるはずだ。

「早く家に戻って、お風呂にゆっくり浸かりたいわ」

妻に出鼻をくじかれ、結局私は病室で滝桜のことは口に出来なかった。三十年連れ添った妻に、どこか遠慮があった。

車を少し走らせてから、

「身体の調子がよさそうだから、ちょっと寄り道して、滝桜を見に行こうか」と私は緩み

そんな頬を引き締めて言った。

「えっ、ほんと？連れて行ってくれるの？」

妻の声には嬉しさと戸惑いが入り混じっていた。

「よかった。今年は桜を見ることが出来ないと思っていたのよ」と慌てたように妻は続けた。

「テレビで見たんだけど、滝桜はね、五年に一度大掛かりな手入れをしているらしい。足場を組んで樹を全部覆うんだって。去年がその年だったから、今年は花の色がいつもより綺麗だって言っていたよ」

「そうなの。楽しみだわ」

病気になる前の妻は、桜の季節になるとよく友人と出かけていた。桜前線を追って山形や秋田まで足を延ばしたこともある。私は花には興味がなく、滝桜を見るのは初めてだった。

駐車場には県外ナンバーの観光バスが多く停まっていた。出店が並んだ石畳の坂道を、私たちはゆっくりと上った。敷石のすき間に風で運ばれた桜の花びらを眼にすると気持ち急いた。

人家を抜けると、滝桜がその姿を忽然と現した。

「これは、すごい」と私は思わず口にした。

すぐにも駆け寄りたくなる。ゆっくりとしか歩けない妻がもどかしかった。

見上げると、何段にも折り重なった滝が天上から襲いかかってくるような迫力がある。まさに滝桜だった。

遠巻きに柵が作られているが、手を伸ばせば届くところまで枝が伸びていて、花があった。

「すごいな」と私は同じ言葉ばかり繰り返した。

十本くらいの尋常でない長さの支柱が、四方に伸びた枝を支えている。滝桜は大鳥居に守られているようだった。

「少し花の色が濃いみたいね」

いつもは直ぐにでも携帯を向ける妻が、見上げているばかりだった。

「写真撮るから、そこに立ってこっちを向いてよ」

「こんな痩せた顔を撮られたくないわ。それよりひと回りしましょう」

滝桜は丘を背にして立っている。柵に沿って一周できるように歩道が整備され、いろいろな角度から見る事が出来る。

一歩一歩確かめるように妻は歩道を上った。丘の上に来ると、滝桜の後ろ姿を見下ろす

ことになった。

「ここからだ、まるで老婆が背を丸めているみたいね」

そう言われると枝垂桜が猫背に見えてくる。風格ある巨木が、妻のたった一言で見る間に姿を変えた。

「どうしていつまでも、こうして樹を生かし続けるのかしら」

妻の独り言のような問いが、私には一瞬理解できなかつた。

「それは、いつまでも花を見ていたいからさ」と私は思い付くままに応えた。

「寄つてたかつて延命措置をされているお婆さんみたいね。胃ろうを施されて、身体は生きていくけど、もうその人にはそこにはいない。滝桜はもう何百年も前からそんな状態だと思ふの。枝が折れないように支柱をしているけど、私はね、台風で枝が折れたり、ことによつたら倒れてもしょうがないと思ふの。いままで千年も全身に花を咲かせたんだからもうくたくたよ。ゆっくり横になりたいのじゃないかしら」

家族はいつまでも一緒にいたいと願う。しかしそこにその人はもういないという妻の言葉に私は返す言葉を見失つた。

駐車場に戻ると、着いたばかりの観光バスから笑顔の見物客が続々と降りていた。

一般部門

優秀賞

大阪府 堺市

お菓子いた！

相野

正（無職）

私が育った村では、四国八十八カ所の遍路旅を本四国、瀬戸内海に浮かぶ小豆島の八十八カ所のミニ版遍路を島四国と呼んでいた。だがこの島は急峻な山が多く、難儀を極めた。

小豆島の向かいの村に住んでいた私たちがその島四国を巡るときは、漁船を頼んで瀬戸の海を一時間で横切り、江洞窟という札所の近くの浜に上げてもらうのが常だった。

四年生に上がる年。いつもの春の朝。曾祖父を先達にした私たち数人はいつものように海を渡っていた。夜明け直後の群青の海。「スパーン、スパーン」と焼き玉エンジンの破裂音を海面に響かせた漁船が大きく揺れる。これから十日近くの巡礼の旅を想うと怖く、緊張する船旅だった。

誰の足跡もない真っ白な砂浜に着くと、防波堤の向こうからペタペタと足音が聞こえてきた。素足にゴムのつっかけを履いた女の子が赤ん坊を背負い、岸壁を走ってくる。

「お遍路さくん、お菓子いた！」

「いた」は「下さい」という意味の讃岐弁だが、普通、遍路には住民が茶菓の接待を施す。

だが島の子供たちには遍路のほうから菓子配る習慣があった。遍路の頭陀袋にはその菓子が入っていた。多くの遍路から菓子をもらえば、幸多い子に育つと言われ、子らが群がる。しかしその日はその子だけだった。

私は自分が好きな乳ボー口を持って来ていた。きつい島の紫外線を浴び、真っ黒に日焼けした少女が差し出した手のひらに、ボー口をバラバラと乗せた。

「ありがとう」そう言いながら少女は背負った赤子の手にもボー口を掴ませた。

「いもうと？」ボー口を頬張る子を指さすと、少女は違うと言う。近所の子だが守りすれば、駄賃や菓子をもたらえるからで、普段、家ではお菓子をもらえないと言ったので、ボー口は全部あげてしまった。

嬉しそうに微笑んだ少女は「庵治からきたん？」と、水平線の山影を指さした。そうだとすると少女は遠いねと眉をしかめた。

翌年もまた同じ海岸に着くと、今度は数人の男の子に囲まれた。ふと見ると輪の外に、あの少女が小さな子の手を引いて立っていた。

先達から飴をもらった男の子がいなくなると手招きして、とっておきのチョコレートに分けて一緒に食べ始めた。遠足にしか買ってもらえなかったが、一年かけてお小遣いを貯め、チョコに替えて持ってきたのだ。

少女は少し背が伸び、色が白くなっていた。

「また会った」と私。

「同じ日やけん、来るとおもったけん」

はにかみながら、「楽しみにしとったけん」と意外に正直な言葉が少女の口から出た。

内気な私は学校では女の子と話をしたことがなかった。しかし島に上がるとなぜか誰とも話げできた。村と違って誰も私のことを知らない。両親のいないことも、産まれた土地でないことも、貧しい暮らしも、何も知られていないという解放感がここにあった。

しかも知らない女の子から待っていたと言われて照れた。生まれて初めての経験だった。大人たちが上陸の準備をしている間、私たちはとりとめのない話をした。

同級生だった。お守りにしたいから納め札が欲しいと言うので、札箱から濃緑の納め札を抜いて渡した。住所と名前が書いてある。

そのとき「A子！」と呼ぶ中年男性の音が響いて、反射的に少女たちは走り出した。呆然とする私に、A子は振り返り、赤いトマトのような笑顔で小さく手を振った。

島に除虫菊の花が咲き、オリーブの白と緑の葉がさざ波のようにそよぐ季節だった。

それからも続いた私の遍路旅だったが、A子とはもう会うことはなかった。翌年からは漁師船が調達できず、フェリーで島に入るようになったからだ。待っているかもしれない

と思いながら、それでも昼下がりにはあの海岸を通ったが、岸壁には昼寝をする猫の姿だけ。手紙も来なかった。

四十年が経ち、私は大阪の企業で採用面接官をしていた。ある年、受験者の若い女性との会話で驚いた。小豆島のY出身。Yはあの江洞窟のある地区だ。思わず懐かしいなと呟くと「どうしてご存知ですか」と彼女。

「さあ。いい思い出があるかもね」とごまかした。彼女はニッコリ笑った。その笑顔は記憶の中のA子に驚くほど似ていた。

母親の名前を確認しようかと、入社したその娘とすれ違うたびに思ったが、聞かなかつた。やがて彼女は母親の看病のため島に帰ると言い残し、退社してしまった。もし母が病気のA子なら、決して幸多い人生にならなかつたのかもしれない。

今年、最愛の妻を病で失った私は、島四国を歩きたくなくなった。私の納め札を持った少女が、水平線を眺めていただろう防波堤に立てば、この持って行き場のない喪失感が少しは晴れるのかもしれないと思いながら。

一般部門

佳作

神奈川県 川崎市

二つの願い

浅井 恵里（英語講師）

七夕の季節が巡ってくる度、目に浮かぶ光景がある。幼稚園の年長だった長男の手を引いて、大きなお腹を揺らしながら丘を登ると、園舎の軒下で笹飾りが風に揺れていた。枝には、願いごとを書いた色とりどりの短冊、網飾りや吹き流しがいっぱいだ。「げんきなあかちゃんが うまれてきますように」と長男が書いてくれた緑色の短冊は、葉っぱのようにくるくると、枝で風に舞っていた。

十月初め、予定日の一週間前に突然、陣痛が起こり、次男が生まれた。が、産声が全く聞こえない。「大丈夫ですか？」と医師に何度も尋ねるうちにだんだんと意識が遠のき、気がつくと病室だった。

元気に生まれるとばかり思っていた次男には重い病気があり、同じ病気の子のほとんどが、生後一ヶ月から一年以内に亡くなると知った。何のためにこの世に生まれて来たのか。そんなことを考え始めると堂々巡りだ。ともかく、今日一日を無事に過ごせるようにと祈りつつ、病院に通った。

交代で病院に出かける夫や私を見送る度、長男は、「ぼくもたいちゃんにあいたいな」とつぶやいた。まだ幼稚園児の長男は病棟に入ることができず、次男に会ったことがなかった。このままずっと、会わせない方がよいのだろうか。夫も私も迷っていた。

生後二ヶ月が経った頃、頻繁に無呼吸発作が起きるようになった。「この次、発作が起こったら、危ないかもしれません」と医師に告げられた時、私達は次男を家に連れて帰る決心をした。少しでも家族一緒に過ごせる時間を持ち、もしその時が来るのであれば、家族みんなで見送りたいと考えた。

次男を家に連れて帰ると、長男は大喜びし、枕元におもちゃを置いたり、泣くとあやしたり、かいがいしく世話をした。

年を越し、正月が過ぎてひと月が経ち、その生命力に、思いの外このままがんばるかもしれないと思い始めた矢先、次男は突然、無呼吸発作を起こし、空へとかえっていった。空気がしんしんと冷たい二月の夜だった。

その春、長男は小学校に入学した。あつという間に夏休み前になり、個人面談に出かけた時のことだ。廊下で順番を待つ間、ふと奥の方に七夕の笹飾りがあるのが目に入った。長男は何と書いたのだろうか。近寄って、名前を探した。

「ぼくのおとうとがかえってきますように」

そう書かれた短冊を見つけた時、身動きがでしなかつた。どんな思いで、この短冊を書いたのか。他の子達の子どもらしい願いごとを思うと、長男の願いが悲しかった。

七夕の季節が巡ってくる度、私は長男が書いてくれた二つの願いごとを思い出す。それは、どちらもかなわなかつた。そして、かなわぬ願いは織姫と彦星も同じなのだろうか、後に催涙雨という言葉を知った。

七夕に降る雨を、織姫と彦星が会えないことを嘆いて流す涙の雨になぞらえて、催涙雨と言うという。七夕の日に晴れ渡った夜空を見られることがそう無いことを思うと、七夕の願いとは本来かなわないものか、と諦めにも似た気持ちになる。

けれどその一方で、たとえこの地上で雨が降っていようと、はるか上方の天空では、二人は逢瀬の時を楽しんでいるのではないか、と思うことがある。どんよりとした目の前の厚い雲を突き抜けた先には、全く違う世界が広がっているのではないか。どんな状況にあっても、人はその向こうに、何かを願わずにはいられないのではないか。

次男を失ったその年、悲しみは悲しみとしてあるがままに、家族三人寄り添うように静かに暮らした。そして翌年、私の中に小さな生命が芽生え、それは少しずつ育まれ、翌年の春に大きな喜びとなった。家族みんなの希望の光のような、娘の誕生だった。

娘は小学生になった今も、街で七夕コーナーを見つけると駆け寄って、「お母さん、願
いごと何がいい？」と聞く。私は何と書こうかと目を閉じ、しばらく考える。まぶたの奥
で、あの日の笹飾りが揺れている。

令和元年度 第5回 藤原正彦エッセイコンクール

概 要

■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

プロフィール

昭和18年旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。
昭和53年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成22年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成26年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。
そのほか、『国家の品格』『決定版この国のけじめ』『天才の栄光と挫折』など著書多数。
平成26年4月、姫路文学館長に就任。
近著に『国家と教養』。

■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400字詰め原稿用紙5枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。令和元年9月15日締め切り。

■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各1編。
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金(中学生・高校生は図書カード)を贈呈。

■ 応募状況 … 応募総数 1,408点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	72点	47	20	67	5	0
高校生部門	780点	605	167	772	8	0
一般部門	556点	72	80	152	403	1
合計	1,408点	724	267	991	416	1

中学生部門：市外では、宍粟市、宝塚市、洲本市、滋賀県、香川県、愛知県、宮城県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は7校であった。

個人応募は6人であった。

高校生部門：県外では、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、愛知県、広島県、長崎県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は10校であった。

個人応募は11人であった。

一般部門：10代から90代まで各世代から応募があったが、そのうち60代以上が過半数を占めた。

他府県からの応募は、北海道から沖縄県まで全国各地に及んだ。

海外からの応募者1人は、ドイツ在住者（日本人）である。

■ 表彰式

日時：令和2年1月25日（土）午後1時30分～3時

会場：姫路文学館 講堂（北館3階）

これまでの入賞作品

(学校名、学年、在住地等は当時のもの)

第1回(平成27年度)

- 【中学生部門】 最優秀賞 「旅路」黒田 智子(兵庫県 姫路市立菅野中学校 2年)
優 秀 賞 「私の小さな夢」仲 優里奈(兵庫県 小林聖心女子学院中学校 1年)
佳 作 「無限に広がる未知の世界」吉岡 杏(兵庫県 小林聖心女子学院中学校 2年)
- 【高校生部門】 最優秀賞 「出逢い」藤阪 希海(兵庫県立姫路西高等学校 1年)
優 秀 賞 「強く生きたい」寺本 栞那(兵庫県立姫路西高等学校 1年)
佳 作 「手のひらの温度」浦野 楓香(兵庫県立姫路商業高等学校 1年)
- 【一般部門】 最優秀賞 「眼」本田 菜美(兵庫県伊丹市 会社員)
優 秀 賞 「ブルー・インパルス」倉垣 裕太(兵庫県姫路市 高校常勤講師)
佳 作 「ある日、棺桶の中で」板東 英樹(愛媛県松山市 会社員)

第2回(平成28年度)

- 【中学生部門】 最優秀賞 「さくらの季節」小西 野杏(兵庫県 小林聖心女子学院中学校 1年)
優 秀 賞 「帰り道」長谷川 詩(兵庫県 姫路市立城山中学校 3年)
佳 作 「大人と子どもの狭間」結城 潮音(兵庫県 姫路市立広畑中学校 2年)
- 【高校生部門】 最優秀賞 「うら」岩間 成美(兵庫県立姫路西高等学校 2年)
優 秀 賞 「頑張るといふこと」小林 あかり(兵庫県立加古川東高等学校 1年)
佳 作 「お手頃な幸せ」中川 知優(兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 2年)
- 【一般部門】 最優秀賞 「世界を名付ける」天野 浩子(兵庫県姫路市 主婦)
優 秀 賞 「また会う未来のために」感王寺 美智子(宮城県気仙沼市 自営業)
佳 作 「嘘の功罪」榎並 掬水(広島県広島市 無職)

第3回(平成29年度)

- 【中学生部門】 最優秀賞 「大人」芳林 郁利(兵庫県 姫路市立白鷺中学校 2年)
優 秀 賞 「祖父の家の庭」牧本 光瑠(岡山県 津山市立北陵中学校 3年)
佳 作 「部屋と家族」山崎 美怜(兵庫県 神戸大学附属中等教育学校 1年)
- 【高校生部門】 最優秀賞 「小さな背中」馬場 日和(兵庫県 小林聖心女子学院高等学校 1年)
優 秀 賞 「六年後の成長、そして未来へ」田中 友梨(兵庫県立加古川東高等学校 2年)
佳 作 「オーバーホール」小國 哲(兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 2年)
- 【一般部門】 最優秀賞 「イタリアのカラス」松下 真記(神奈川県藤沢市 主婦・大学非常勤講師)
優 秀 賞 「ご利益」松岡 智恵子(長野県松本市 心理カウンセラー)
佳 作 「星を片づける」佐々木 裕子(埼玉県鴻巣市 主婦)

第4回(平成30年度)

- 【中学生部門】 最優秀賞 「愛しき太古の生きものと私」瀧谷 咲月(兵庫県 赤穂市立赤穂中学校 3年)
優 秀 賞 「震災遺構は残すべきか」菊地 馨(宮城県仙台二華中学校 1年)
佳 作 「悲劇のヒロイン病」土屋 結布(兵庫県 姫路市立安室中学校 3年)
- 【高校生部門】 最優秀賞 「奏でよう、人生の組曲」広石 亜美(兵庫県立伊丹高等学校 2年)
優 秀 賞 「口の中の氷」木村 直希(兵庫県 西宮市立西宮東高等学校 1年)
佳 作 「私の夢」三好 一那(兵庫県 神戸市立神港橋高等学校 1年)
- 【一般部門】 最優秀賞 「古の徳利の慰め」原田 裕乃(兵庫県姫路市 公務員)
優 秀 賞 「おみちように」高市 俊次(愛媛県砥部町 無職)
佳 作 「何でも無い日に」星 香弥乃(東京都大田区 主婦)